

元住吉山式土器の研究

岡 田 憲 一

近畿地方において縄文時代後期中葉から後葉にかけて、その編年的位置づけを与えられている「元住吉山式土器」の再考、および再生を本論では企図した。その要旨を以下に述べる。

1. 再考とは、本来、その設定者である小林行雄・佐々木謙両氏の業績を最大限汲み取る形で、彼らの予期して成し遂げられなかった「元住吉山式土器の研究」を完遂することであり、それを巡る研究史上の逡巡を、土器個体資料に基づいて再評価し直すことにある。

現在専ら用いられる編年の根幹は、大凡、泉拓良氏が樹立したといつてよい。氏の研究もまた、先学の成果によって立つことは当然であるが、その評価されるべきは、自ら課題となる資料に向い、それを分析することによって得られた結論であるということにあらう。しかしながら、氏の再設定した当該期土器型式たる「一乗寺K式」にしても、後続する元住吉山Ⅰ式、元住吉山Ⅱ式にしても、その紹介は専ら概説書の形をとっておこなわれたものであるし、なお、標式資料たる土器も数多く示し、解されたわけではない。したがって、これを再生しようとするものは、当然これに立ち向かわなければならない。その理由から、本稿は一乗寺向畑町遺跡出土土器の検討からおこす。

京都市・一乗寺向畑町遺跡北部地区の土器が「一乗寺K式」の標式資料であるが、筆者はここより出土の波状口縁深鉢形土器を検討の結果、それが少なくとも4段階に渡る型式学的変遷を遂げるものとの仮説を提示する

にいたった。そしてまた、それらは口縁部形態およびそこに配される文様意匠と胴部のそれとが密接に関連しあいながら変遷し、なおかつ、その他の器種ともある規範に従う形でその文様が交換されたりすることによって、それらの関係が、常に保たれようとする方向性と、再編されてゆこうとする方向性ともって展開することを示した。

一乗寺向畑町遺跡北部地区の変遷はpreK 1群→K 1群→K 2群→K 3群という形で表記したが、K 3群は泉氏の言うところの元住吉山Ⅰ式にあたる。氏は元住吉山Ⅰ式の基準資料として、同じく一乗寺向畑町遺跡の南部地区出土土器をもって説明をおこなうが、それは元住吉山Ⅰ式の中でもより新相のものとされてきた。その古新の細分可能性を表明したときに触れたのが京都府城陽市・森山遺跡の集落跡である。

森山遺跡には少なく見積もっても6基の当該期住居跡が検出されており、その内の2基が重複切り合い関係を有している。したがって、その両者の間には新古の関係が想定される。実際、その両者の出土資料を比較検討すると、切られた側の包含土器には一乗寺北K 3群と共通する様相が、切った側のそれには一乗寺向畑町遺跡南部地区出土土器との関連が伺えた。それゆえ、この資料に基づき、その一括性を評価して、前者を「森山Ⅰ期」、後者を「森山Ⅱ期」と仮称した。さらにまた、この両者における型式学的方向性を検討、抽出し、その延長線上にのる資料として、凹線文土器を主体的に包含する土坑SK35の内容を検討、これが元住吉山Ⅱ式に比定されるべき良好な一括資料であるとの結論を得るにいたり、暫定的に「森山Ⅲ期」を仮称した。

これら研究史の俎上にあげられた土器群を再検討することによって得られた筆者の変遷観はpreK 1群→K 1群→K 2群→森山Ⅰ期→森山Ⅱ期→森山Ⅲ期というものである。

2. 上記の仮説を質量豊富な遺跡によって検証し、それらの土器相の変遷

を体系的に叙述せんと試みたのが、兵庫県東浦町・佃遺跡出土土器の分析である。本遺跡においては層位的発掘調査がなされており、土器の通時的な変化を追求するに適した条件を備えている。また、「元住吉山式」の標式遺跡である神戸市・元住吉山遺跡にも遠くない地理的環境にあり、その名を冠される内容を描出するには最適といえよう。

はじめに、本遺跡の何層かにわたることにより、時間幅の想定される出土土器の総体を鳥瞰した体系的分類を提示する。当然、そこには先の研究成果が取り込まれるよう考慮した。それを層位的知見に従い定量的データとして採取した結果、そこには23層から9層、そして8層にわたって、各器種口縁部形態における変遷が跡付けられることが明瞭となった。なお、一乗寺向畑町遺跡を題材にすでに検討した波状口縁深鉢については、同様の傾向は窺えるものの、まったく同じ結果とはならない。両遺跡間の胴部文様には共通の意匠が認められるものの、佃遺跡においては同期すべき口縁部形態の出現頻度が低く、そこに地域差を看取しなければならないためである。他の器種については、特殊な形態を有する注口付土器の変遷を通観することを鍵とし、その各器種間の口縁部形態および文様の交換関係にもとづき、その再編が頻繁に繰り返された点を強調し、それが他器形すべてを総括する共時的各土器相に通じて見られることを確認、その体系の通時的な変化を叙述することで、「元住吉山式土器」の構造を示した。

3. その一つの形としての顕れは、元住吉山Ⅱ式、凹線文の派生に認められる。これは従来、「凹線文土器群」として理解される始めであり、列島西半における広域分布性が、なお課題として取り沙汰されるものである。この成立については、未だ実態に込めうるモデルが立てられていないが、筆者はこの生成、派生が、佃遺跡出土土器による先の叙述に基づく論理的展開によって跡付けられることを示した。

そしてまた、その広域性に込めるために、その発生前段階における広域

に渡る土器群の分布・交渉関係を、編年を整備するのと並行して渉猟した。その結果、それら各地域間の密接な関係にのってそれが発現したことを詳らかにしえた。

4. 土器がヒトによって作られ、使われ、捨てられる。そしてそれを取り巻く思念がある。といった生態的発想に基づき土器を分析することを試みた。その方法は「chaîne opératoire (工程連鎖)」という概念に負うところが多くある。

ひとつに、機能をより反映する可能性の高い器種間において、製作時の技術的要素の負担度の相違を指摘、さらに層位に基づき、その通時的变化が先に叙述した型式論的変遷観に合致する形で移行する様を示すことによって、土器生産体制を念頭に置いた型式変化モデル樹立の可能性を模索した。そのなかにあって特記されるのは、波状口縁深鉢と広口深鉢二項の背反する様相であり、文様意匠、技術的要素において相違を示すばかりでなく、一方は保守的で在りながらその数を減じ、他方は簡略を追求しながら急増して大勢を占めるにいたる現象で、その後者が凹線文土器を荷う役を果たす事実は、該期の土器からの文様の省略をよく説明するであろう。その対となる波状口縁深鉢の一部に、施文に際しての興味深い数的な法則性を指摘できるが、このような「Design System」の発生素地を検討、それが先にみた広域な土器間交渉の一端より来ったことを示すとともに、それが土偶祭式とも関連をもって立ち現れることを展望した。

したがって、常に再編を繰り返していた土器相は、単純に生活機能の変化に基づいて生じていたものではなく、社会の再生産の端末として顕れていたことが強調されよう。元住吉山式土器を重要な契機とした土器の無文化とは、それらが荷った社会的機能の再編であり、晩期社会をにらむ大きな再生であったと考察する。